

フランス革命時におけるアーサー・ヤングの地理的観察眼 —『フランス紀行』を中心に—

大 嶽 幸 彦*

(平成5年4月12日受理)

要 旨

本稿は、アーサー・ヤング著『フランス紀行』を基に、地理的観察眼のすぐれた例を分析したものである。筆者は、風景・景觀、気候・水文、土地所有と土地利用、都市、道路・交通・商工業、革命下のフランスに分けて、検討を試みた。その結果、本書がフランス革命前後の地理的様相を知る貴重な資料の1つであることが明らかとなった。

KEY WORDS

Arthur Young アーサー・ヤング

Geographical Eye of Observation 地理的観察眼

France under the French Revolution 革命下のフランス

1 はじめに

筆者は既に、スタンダールとゲーテの旅行記を中心に、いわゆる地理学者とは見なされていない旅行者の中に、地理学者の目、観察眼をもっている者の存在を指摘し、その旅行記の分析を試みたことがある¹⁾。本稿で取り上げたアーサー・ヤングも後述するように、地理学者ではないが、フランス国内の旅行を通して鋭い観察眼を発揮している点は、前両者に勝るとも劣らない。地理学史上の名著と称される『地理学、その歴史、本質および方法』の中で、ヘットナーは次のように述べている。「文章による叙述は種々の形式で行なわれる。方法的には、我々が年代記の歴史資料の叙述と対比できるような、特別な地理的形式をあげれば、それは旅行記である。……中略……科学的研究家の旅行記には総合的な記載や論究が行なわれた。それらの価値は、もちろん旅行家の素質や科学的な教養によって差異を生じる。旅行記は大いに利用されねばならない。すなわち、それらの中の個々の観察から地誌的なものかあるいは一般地理的な意味のものを選び出し、より組織系統的に総合しなければならない²⁾。」本稿のまとめ方も同様な立場を取っている。

フランス革命時とヤングの旅行時が一致するため、ヤング著『フランス紀行』の内容は極めて波瀾に富んだものである³⁾が、観察した内容は比較的冷静に書き留められている。アーサー・ヤングは3回の旅行、第1回は1787年5月15日から11月11日、第2回は1788年7月30日から10月15日、第3回は1789年6月2日から1790年1月30日にかけてフランス国内を主に旅行してい

* 社会系教育講座

る(図1)。第1回はフランスの西南部, 第2回は西部, 第3回は東部, 中央部, 東南部を旅行し, スペインやイタリアにも足を伸ばしている⁴⁾。訳者のあとがきによれば, ヤングはイギリスのサファク州での農業経営のかたわら, 雑誌に農業問題の論文を寄稿して注目を集めたという。その後, 農業問題の著述に専念し, 次々と著作を刊行して, 農業問題の専門家となり, イギリス王立学会の会員に選出されたほか, ドイツ, イタリアの農業学会でも会員に選出されて名声を博している。ヤング著『フランス紀行』は, 本文の検討で明らかにするように, 様々なテーマを詳細に記

録しているが, 主な調査目的はフランス農業経済の実態を知ることにあつた。ピレネー山脈への旅とイタリアからの帰途パリまでの行程を別にすれば, ほとんどが一人旅である。乗物は2回目までが主として馬であって, 3回目だけは各種の交通手段を用いている。3回目の旅行, 1789年にはフランス革命に遭遇している。

以下, 本文の記述内容を筆者の考えで, 1) 風景・景観, 2) 気候・水文, 3) 土地所有と土地利用, 4) 都市, 5) 道路・交通・商工業, 6) 革命下のフランスに分類して, アーサー・ヤングの地理的観察眼を検討することにした。なお, 本文では我が国であまり知られていない地方名や小都市名が次々と出てくるが, 注をつける煩に堪える必要は無いものと判断した。

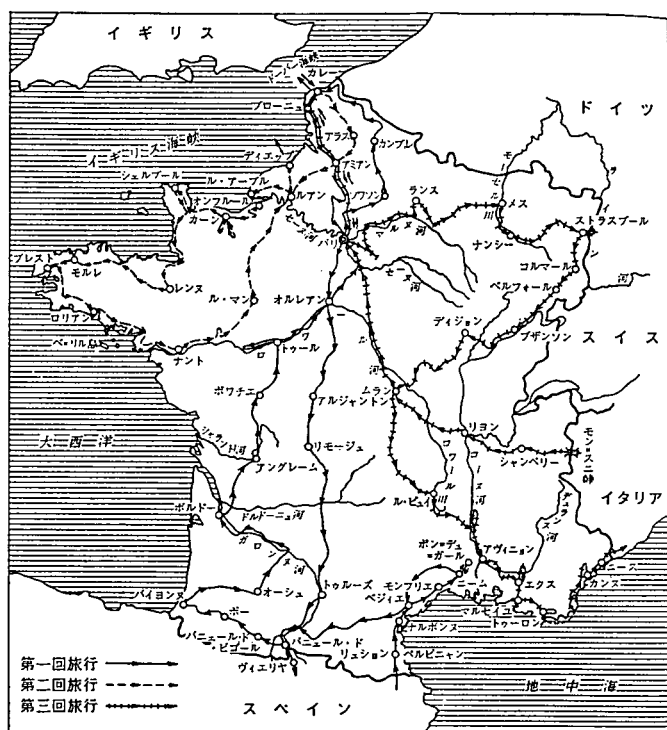


図1 アーサー・ヤングの行程

宮崎洋訳『フランス紀行』法政大学出版局 p. 403 より転載

2 アーサー・ヤングの地理的観察眼

1) 風景・景観

風景や景観に関する記述は旅行記一般によく登場する項目であるが, ヤングも旅の全行程で

言及している。中でも特徴的なのは風景の美しい箇所をよく発見し、その日のうちに記録に残していることで、フィールドに出た地理学者そのものと言ってよい。開放耕地 (Open Field) で知られたボース地方の農業景観 (p. 24) やリモージュに着くまでの森と湖の美しい風景 (p. 28) が記述される。サンジョルジュからブリーブまで、34マイルに及ぶ地方の美しさは、とても多種多様で、あらゆる点で顕著であり、興味深いから、個々の描写にいちいち気を配らないことにする (p. 32) と述べる程である。南仏のラングドックでは、次のような脱穀風景を目撃している。「穀物はすべて乾いた堅い場所に乱雑に積み上げられている。そこでは、多数のロバと馬が円を描いて小走りに走らされている。」 (p. 55)。ボカージュ Bocage と散居制はフランス農村景観の一つの典型であるが、パニユール＝ド・リュションからオーシュまでの270マイルの間で観察している (p. 75)。ロワール河附近の丘では、次のような穴居も見つけている。「白亜質の丘が河に垂直に切れ落ちる地点で、丘はとても奇妙な景観を呈し、珍しいことに、人の住む所となっている。なぜなら、たくさんの住いが白い岩膚をくり抜いてできているからだ。それらの住いの正面には、石の細工がしてあり、上部には煙突代りに穴があいている」 (p. 86)。ナントの近郊、3マイルの所では、「野焼きして、小麦の種子をまき、それからライ麦の種子をまき、最後に大麦の種子をまく。こうして、それをくる年もくる年もくりかえす。相も変わらぬ愚劣、相も変わらぬへま、相も変わらぬ無知。この地方の連中は皆、今もそれをくりかえしては、この荒地は何の役にも立たない、と口を揃えて言った。驚いたことに、この荒地が大商業都市ナントから3マイル以内にまで及んでいる。」 (pp. 146～147) といった農業に関する無知が、開墾の失敗による荒地を生んだものと批判している。土地利用に関しては、別に項目を立てて後に詳しく検討したい。

ところで、ロワール河附近のブドウの収穫風景を、これまで当地ほどきわだった収穫風景を見たことがない (p. 150) と激賞している。アルザスの風景については、ストラスブールのカテドラルの塔から次のように評している。「塔からは雄大で豊かな平野を俯瞰できる。その平野を貫いて流れるライン河は、多数の島々のために、河というより、湖水のつらなりのような様相を呈している。」 (p. 225)。ライン川改修以前の風景が現前として来るではなかろうか。ストラスブールで2年間学んだゲーテも『詩と真実』の中で、塔からの風景をより感動的に書き記している⁵⁾。オーベルニュ地方に入ると、火山地形による多数の円錐形の山々が存在する。ある山上には、村があり、他の山上には、ローマ時代の城がある (p. 259)。

南仏、プロヴァンス地方の景観は地中海式気候、石灰岩質の土地であって、フランスの他の地方とは大きく異なるが、ヤングは次のように記述している。「あたり一面はますます興味深くなる。山々はますます険しくなる。景観に海が加わる。荘厳な様相をした岩塊の狭間に一本の道がある。10分の9は荒涼とした山で、気候とはうらはらに、松の木とツゲの木と貧弱な芽香植物のみじめな地方である。」 (p. 287)。プロヴァンスの海岸風景を見て、土地柄からいえば、これらの山地ではどこでも、羊と家畜を飼育するのに有益な飼料を提供してもよさそうであるが、牧草は全く役に立たない灌木に邪魔されて生えていない (p. 293) としている。最後に、イタリアへの旅行の後、通過したサヴォワ地方の風景についても、次のように美しさを称えている。「丘にしろ谷にしろ、一切がたつぷりと自然の荒々しさにもまれているから、森林の樹態の不ぞろいにふさわしく、その風姿は奔放だ。だが、それは耕地と人家に和らげられ、融和されて、とてつもなく美しくなる。」 (p. 307)。

以上、フランス各地の風景の美しさをヤングが発見し、記録にとどめている点が指摘しうる。

次に、気候・水文に関する考察を取り上げたい。

2) 気候・水文

風景・景観に関するヤングの記述の頻繁さに比べると、気候・水文に関するそれは、そう多くはない。一ヶ所にあまり長く滞在しない周遊型の馬旅であるから、じっくり事象を観察・計測している余裕が無かったのかもしれない。次に、その中のいくつかの例を取り上げてみたい。山地における水循環は水文学の教科書によく取り上げられるテーマであるが、ピレネーの山中で、次のような考察を試みている。「山々には、大気中を移動する雲を止めるばかりか、雲を作り出す力もあるかのようだ。というのも、沢筋から立ちのぼり、尾根をはい上り、次第に増え、やがては山の頂にどっかり腰をすえる重い雲になったり、大気中に立ちのぼり、他の雲と共に去ることになる、最初は薄いもやのような小さな雲を見てとれるからである。」(p. 50)。

緯度では北緯約42度から45度と比較的中緯度にある南仏ではあるが、夏の暑さは人通りがなくなる程の酷暑である。筆者は内陸のリヨンに、1969年6月末から9月末まで滞在したことがあるが、日中の暑さに閉口したことを覚えている。「暗い部屋から屋根付きバルコニーに出て行くと、まるで天火の中に入って行くようだ。毎日4時まで外出しないよう忠告されていた。午前10時から午後5時まで、暑さのために、身体を動かすことはことごとくとても大儀になる。」(pp. 69~70)と述べているのは、少しも誇張ではない。しかし、夏の暑さも北風が吹けば和らぐのであるが、アーサー・ヤングにとっては不快さをむしろ感じさせるのである。「数日間快晴だが、北風が吹きまくった。これがしばしばむしむしして重苦しい暑さを和らげている。私の知る限りでは、これはフランス人の体質に合っているようだが、私には死の苦しみだ。私は身体がだるくてどうにでもなれという気になった。まるで病気になるかのように、これまでとは異なった、ただごとではない感じが全身を襲った。」(p. 274)。ニースは当時、イギリス人の避寒地の一つであったが(p. 297)、それも背後の山地が屏風のように、局地風の一種で寒冷な強風、ミストラル Mistral を遮るため温暖なのである。

3) 土地所有と土地利用

ヤングがフランスを旅行した当時、南仏は分益小作制度が卓越していたが、それと小土地所有制度とを比較している。馬上で、文献の参照なしに土地所有制度について思いを巡らすのであるから、ヤングの考察は厳密さで問題が多々残るかもしれない。しかしながら、その点を勘案しても、旅の途上、土地所有制度に言及し、土地利用への影響を考察した箇所も興味深いものがある。

まず、分益小作については、全農村の災いと荒廃の原因になっている(p. 31)と指摘する。サン＝ローランでは多くの灌漑地を見ているが、そこは雑壇式と整然と耕地になっている。勤勉な働き振り、生き生きとした動作は自己所有地であるためであろう(p. 64)と推測しているのは適切な判断である。ポーからモナンまでは小土地所有農の耕地である。「彼らの農地は連中を墮落と貧困に陥れるほど狭くない。清潔や温かみや満足の様子が全体にみみぎっている。この様子は、新築の家や厩、小さな菜園、生垣、玄関前に広がる小庭、家禽の小屋や豚小屋からさえも、うかがい知ることができる。農民は自分自身の幸福が9年契約の小作の糸につながっていたら、自分の豚まで住み心地よくしてやろうなんて思うまい。」(p. 72)。農民も自分の土地であるからこそ知恵を絞り、精出して働くのである。「大河ガロンヌ、ドルドーニュ、シャラン

トにはさまれたこの地方37マイル、したがって、市場をひかえたフランスでも最良の地方の一つに、未開墾の荒地が驚くほどある。……中略……その人の所領が荒れはてて、手つかずのままであること請け合いである。」(pp. 81~82)。フランスの貴族はパリや都市に住みたがり、農業に関心を持つことが比較的少ないのは周知の事実である。農村での所領はあくまで地代の場・娯楽の場、狩猟の地なのである。「フランス貴族には、織機や船のやりだしについて語るように、単なる空論をもて遊ぶ場合を別にすれば、自分たちの習慣や仕事とは無縁の他の対象にかかわりあう気がないのと同様、実際に農業をやったり、それを話題にしたりする気もない。私はこの無関心を理由に彼らを非難する気はないが、農業について夢想にふけるばかりの著述家どもはひどいと思う。連中ときたら、都会の自分の部屋で、ほとんど信じがたいような見当ちがいをいだいて、フランスに無意味な理論を氾濫させたが、その理論たるや、王国の全貴族をあいそづかせ、破産させてあまりある。」(p. 162)。大都会のビルの中で、現地を見ずに政策を立案し勝ちな今日においても、或る程度言えることであろう。領主がいるかないかで住民の暮らしにも差異がある。「上サヴォワには、領主がいらないし、一般に、住民は楽な暮らしをしている。彼らは小土地所有者で、その地味には、自然による規制があるのに、住民が貧乏で惨めな暮らしをしている下サヴォワの地方とほとんど同じ価値がある。」(p. 305)。

ヤングは農業の専門家であるだけに、土地利用の粗放化や豊かな土地が荒地のままに放棄されていることに関しては批判的である。クレルモンの郊外では、ぶどう畑、菜園、耕地の混合形態を指摘する(p. 17)が、これは良い例である。ソーニユでは、ヒースの生い茂った荒地を伴う、砂だらけで不毛な砂利の低湿地が続く。ここで土地を耕作する貧農は、分益小作農である(p. 25)。カオールのブドウ酒は大変な評判をとっているが、真南に向いた岩石のごつごつした丘の上にある一連のぶどう畑の産物である(p. 36)。ピレネーの山中では草地の灌漑が完璧に行われている(p. 45)。また、スペインの牧畜業者がフランス領の山々にある放牧場を賃借し、移牧を行なっている(p. 51)。フランスでは小麦を2度、3度、4度と連作しているが、ヤングは地味によってはカブかキャベツを作ったらいとして輪作をすすめている(p. 183)。ボーヌ地方では、ぶどう畑を知りたくて、ヌイに足を止め、へいに囲まれているシトー会士の修道院に所属する100ジュール(約33ha、筆者注)のぶどう畑を調査している(p. 246)。

土地利用の粗放性は分益小作農制がもたらすものであることを、ヤングは次の例で示す。「オータンからロワール河まで、すべての土地は、施肥や排水といった費用のかかる作業によらなくとも、土壤に適した作物を輪作⁹⁾するだけで、見事な改良農地になる。こうした地方が、富裕な耕作者によらず、飢えに苦しむ分益小作農の手で運営されているのを見ると、現今の悩みがどんなに深くても、領主というものに哀れみを感じない。」(p. 248)と批判的である。プロヴァンスでは、香水用の花畑を見学している。ローズマリー、ラヴェンダー、ベルガモット、そしてオレンジが主たる栽培品種である(p. 294)。また、プロヴァンスではある貴族の果樹園を調査している。「それは約2エーカー(0.8ha)の土地で、ありふれた野菜の収穫を別にしても、オレンジの木だけで年に30ルイ・ドール(ルイ金貨)分産出する。この産物が重きをなすということは、人間生活の墮落であり、市場目当ての果樹園がニース貴族の経済的支配に服していれば、私を不快にさせる理由そのものとなる」(p. 299)と、自家消費を切りつめてまで儲けようとするやり方にも批判的である。リヨン郊外の山地ではまた荒地を発見し、次のように言う。「約10マイル行くと、山地に着く。一帯は荒涼としている。囲い込み地 enclos も桑畑もぶどう畑もなく、未開墾の荒地が多い。あのような大都会の郊外を思わせるものはなにもない。」

(p. 312)と、大都市近郊農業の未発展に驚いている。未利用のままの荒廃地に対しては、ヤングは次のように怒りを隠せない。「本当に公的不法妨害になるものがあるとすれば、それは自分で耕す気もなければ、人に耕させる気もないのに、未開墾の荒地をもったまま手放さない人だからだ。貧民は多数の人々を養える未開墾の荒地を横目に、パンの欠乏で死んでいる。」(p. 318)。

以上の諸例にみられるように、フランス革命前夜の農村の窮状と、それを放置する貴族・領主層への批判に関するヤングの筆は厳しく、かつ鋭いものがある。

4) 都 市

3回の旅行で立ち寄った都市については、ほとんど何らかの言及をしているが、遠見での美しさと都市の内側に入った時のきたなさ、ゴタゴタへの指摘が特徴的である。全てを取り上げるとまは無いので、そのうちのいくつかを取り出してみよう。

リムーザン地方の中心地、リモージュは「まぎれもなく、ローマ時代の宿駅だった。今なお、古い遺跡が若干残っている。通りは狭く、曲りくねり、家並は高層だが、不愉快で、街としてはごちゃごちゃしている。」(p. 29)と不評である。西南部の中心都市、トゥルーズは大変古めかくし、大変大きい、規模の割に人口は多くない。建物は煉瓦と木材とを材料にしている、その結果、沈んだ外観を呈している(p. 39)。スペインとの国境に近く、西南端にあるバイヨンヌは美しい都市の例である。「家屋が立派な石造りであるばかりでなく、通りも広い。四角な形ではないのに、良い印象を受ける多くの広場がある。川は広々としていて、多くの家がそれに面しているので、橋からの家並のながめは美しい。遊歩道には魅力がある。遊歩道にはたくさんの並木がある。」(p. 73)。

北部の工業都市リールに関しては、種油を絞るたくさんの風車に囲まれているが、その数たるや世界のどこを探しても到底見ることができない位だと思ふ(p. 118)と述べているが、旅行者であるゆえ、統計数値で判断を裏付けているわけではない。ノルマンディーの小さな町、グランヴィルについては、「町に入ると、美的観念はことごとく消え失せる。狭苦しく、不潔で、物騒で、ごちゃごちゃした穴ぐら。定期市のたつ日、フランスの市ではよく見かける無数の怠け者」(p. 137)と手厳しい。ブルターニュの港湾都市、ブレストは「建物^{いち}が立派で、たくさんの整然とした美しい通りがある。多くの軍艦やその他の船が碇泊している埠頭には、海港を活気づかせるあの生気と躍動が充ちあふれている。」(p. 142)。大聖堂のあるシャンパーニュの中心都市、ランスもほめられている。「通りという通りはほとんどどれも幅広く、直線で、申し分のない作りで、その点では、これまで見たことのある最も立派な通りにも匹敵する。」(p. 212)。ブルゴーニュの中心都市、ディジョンも同様に美しい都会であるし、歩道までであると述べている(p. 239)。しかし、一般には都市の通りは狭く、ごちゃごちゃしていて、曲っており、ほこりっぽくて、悪臭を放ち⁷⁾、遊歩道に面した数軒のかなり良い家以外、どの家にも陽は当たらないし、ほとんど風さえ通らない(p. 33)のような例が多いのである。

5) 道路・交通・商工業

都市内部の道路は狭くて曲りくねった例が多いのに対し、街道には多大な費用をかけることがある。ナルボンヌ近くの道路では、「ゆるい傾斜までも水平にするため、莫大な費用が費やされてきた。道路は土盛りの上に作られ、両側面を溝で囲まれ、1つの堅い人工道路をなしてい

る。」(p. 54)。しかし、立派な道路での交通取締りは野放しであることを、出会う荷車という荷車、御者が居眠りしていたことから推測している(p. 59)。その記事の書かれた7月25日といえ、ラングドックは酷暑の時期であり、交通量が少なければ御者の居眠りも出ようというものである。フランスの道路の素晴らしさは、スペインからの帰途、次のように実感している。「カタルーニャの手も加えずにはあったらかしのひどい道路から、たちまち、フランスの街道を特徴づけるがんじょうで鷹揚に作られた素晴らしい道路を歩くことができる。」(p. 52)。これと引き換えに、パリの道の悪さといったら無い。「今日は終日どしゃ降りだった。パリの通りがどんなにぬかるんで、歩道のない所では、歩行がどんなに不便で危ないものか、ロンドンに住み慣れた人には到底信じられまい。」(p. 103)と、両者を比較している。その狭い通りを四輪馬車や二輪幌馬車が無茶苦茶にスピードをだすから迷惑千万で、通りがとても危険になっている(p. 114)という。ヤング自身、何度もどぶの泥をはねかけられている⁸⁾。

イギリスと比べ産業革命の開始が遅かったフランスの交通の遅れに対しては、次のように指摘する。「イギリスの富、活動、そして知性の、精力的で急速な普及の中で旅することに慣れた人々にとっては、人の気持ちにぴったりくる言葉で、フランスの鈍さとはばかばかしさを表現することはできない。」(p. 210)。その他、水面を9つの水門で区切って丘を下るラングドック運河の工事に感心したり(p. 56)、多くの丘や谷の下さえもトンネルで通っているピカルディー運河も見学している(p. 116)。

ヤングの関心が農業にあるためか、商工業に関する記述は比較的少ないし、あっても少し触れる程度である。コダックでは見事な穀物用水車を見物している(p. 83)。シャテルローでは刃物マニュファクチュアがあり、ナイフ、はさみ等の販売攻勢にあっている(p. 84)。ここのマニュファクチュアは、もっぱら家族の補助労働だけを頼りに自分で全工程をやってしまう、別々で横の関係のない手工業者の手中にあるとしている。リアンクールに近い村では、亜麻布と、麻糸と木綿糸の混紡織物のマニュファクチュアを見学している。稼働中の織機は25台あり、紡績機を据えられているから、労働者に雇用先を提供している。ギブレの定期市では、600万(26万2500ポンド)の商品が売却されることを聞き出している。定期市では多量のイギリス商品、つまり金物類、女王焼きの陶器、毛織物、綿織物を見ている。ノルマンディーのルヴィエでは、民衆による機械の打ちこわしに会い、紡績工場が操業を停止している(p. 321)点を聞き取りしている。

6) 革命下のフランス

既に言及したように、第3回目の旅行時はフランス革命に遭遇したため嫌疑をかけられたり、逮捕されかけたりと、ヤングは困難な局面に何度も立たされている。本文の記述では詳しく論じられている所もあるが、本稿のテーマと逸脱するので、ここでは簡単に述べておくだけにとどめたい。

ピレネー山脈近くのルルドの城砦では、7、8人の国事犯が収容されている。「彼らは用心に怠りない専制政治の冷酷な手で、家庭の団欒から、妻子や友人から引き離され、身におぼえない罪のために、……こんなひどい悲惨な所で苦しい生活を送っている。」(p. 71)と同情している。革命前夜のパリでは過激な出版物が出まわっているのに、宮廷が何ら措置を講じていないのに驚いている(pp. 170～171)。ナンシーでもパンの値段は高騰しており、民衆は暴動を起す寸前にあるが、人々はあえて動こうとはしない。パリの考えを知るまで、自分たち自身の意

見をもとうとさえしない (p. 219) と論評している。パリの意見が地方に発せられる点は、現在でも変わりはなく、中央集権主義の慣行は続いている。ストラスプールでは、略奪風景を屋根の上から観察している (p. 227)。ブザンソンへの手前、リルでは人々に取り囲まれ、イギリス人である証明の演説を行なって難を逃れている (p. 232)。クレルモン近郊では、2、3の泉と灌漑地を見るため人を雇ったところ、案内役を買って出た現地の人が投獄されかかり、必死に弁護して助けている (pp. 257~258)。火山の多い地方のある宿では、夜11時に武装した民兵にベットを取り囲まれ、尋問を受け、間一髪で助かっている (pp. 266~267)。しかし、ヴィルヌーヴ＝ド＝ベルクでも民兵に探し出されている。「なぜ一介のサファクの農業家がヴィヴァレを旅行するのか理解できなかったし、農業を目当てに旅行する人物なんか聞いたこともなかったのだ。」 (p. 268) と書き記している。土地利用調査で、地理学研究者が税務署の職員と間違われ、警戒されるのと同様である。ただ知ることの好奇心を充たすために調査をするとは、余程の物好きと取られればまだ良い方である。

ところで、旅をすることは自己をみつめることであるし、自国と旅行中の国との比較を自然に試みることでもある⁹⁾。あるフランス人がイギリスには樹木があるかとか、川はあるかとか質問して来て、ヤングが適当に答えても、相手がすくうなづく程の無知に驚いている (p. 66)。ロンドンとパリの交通量を比較しては次のように言う。「ある所にじっとしていて、別の場所に移動する気がないとしたら、フランス人はこの世で一番御輿をすえた国民にちがいない。イギリス人は最も落ち着きがないにちがいないし、動かないで人生を享受するより、ある所から別の所へ移ることに喜びを感じている。」 (p. 101)。

清潔さに関しては、次のように比較している。「身体はフランス人の方が清潔だが、家はイギリス人のそれの方が清潔だ。……中略……フランスでは、どの部屋にも手を洗うたらいと同じくらいビデが普及している。……中略……人は階層の上下を問わず部屋中につばを吐いているが、こうした行為は忌むらしい。」 (p. 334)。「イギリス人に較べて、私はフランス人に能弁、快活、一般的礼儀正しさを期待していた。ところが、彼らはイギリス人ほどおしゃべりでないし、明るくないし、丁重でもないと思う。私が言っているのは、ある特定階層の人々についてではなく、一般大衆についてである。」 (p. 336)。ヤングの見方は辛らつであるが、フランス革命前夜では、異邦人の混じる中でうっかり物を言えなかったのではなからうか。旅宿の共同食卓で、フランス人が聞かれたことに一言答える以外は沈黙を保っている (p. 126) ことに各所で不満を抱いているが、クレルモンフェランでも「ほとんど何も政治が話題にならない。この連中の無知とばかばかしさは、全く信じがたいものがある。」 (p. 259) と述べている。しかし、これもヤングの独断であろう。旅行者に独断と偏見はつきものであるし、政治を話題にできぬ程、フランス革命前夜の政情は緊迫したものがあったということであろう。

3 お わ り に か え て

以上、1) 風景・景観、2) 気候・水文、3) 土地所有と土地利用、4) 都市、5) 道路・交通・商工業、6) 革命下のフランスに分けて、『フランス紀行』の記述内容の検討を試みて来たが、ヤングの好奇心が多岐にわたるのと何でも記録に留めてあるため、以上におさまりきれない点が多々ある。ここでは、一応、その他として取り上げてみたい。

まず、取り上げるべきは靴・靴下をもはかない民衆の貧困を目撃した記述 (p. 35, p. 83, p. 139, p. 206, pp. 214~215) である。ブルターニュでは、「貧乏人の住まいはよいとはいえない。連中の住まいはガラスも入っていないし、ほとんど日ざしも入らない無惨な泥小屋だが、オンドルがある。」(p. 140)。ヤングは紹介状をもってフランス国内の旅行を続けたゆえ、各地の名士と食事を共にしている。その折の会話の内容にも見るべきものがあるが、一方でピレネー近くでは次のように言っている。「無気力とお上品、無関心と慇懃無礼がないまぜになった思想には、人を怒らせたり、人に示唆を与えるだけの力がない。洗練味が大いにある場合、主張すべき論点がない。議論や討論がないなら、会話なんて何になるのか。」(p. 48)。しかし、当り障りの無い会話が日常では普通では無かろうか。食事の値段も、暴利をむさぼられて憤慨したり (p. 93)、安くてうまくて満足したり (p. 144) とフランス各地で様ざまであり、旅宿についての不満も至る所に記述されている。ヤングに言わせると、「物価高がフランスの一般的特色である。しかし、反対の事例に注目して初めて公平といえよう。……」(p. 75) と冷静に書き留めている。ブルターニュはケルト族の流れをひくブルトン人の多いフランス北西端の地方であるが、そこについては「彼らがフランス人とは似ても似つかぬ人びとだということが分かる。当地に住みついて1300年もたちながら、別の言葉、作法、服装その他フランス人とは似ても似つかぬ特色をまだ保持しているとは驚きである。」(p. 141) と述べている。ヴォージュ山地の東側、アルザスについても、同様の印象を述べている (p. 223)。フランス地理学派が得意とした地域研究の素材、人間集団の孤立性をもたらす独特の地域の特徴が当時は顕著であったことがわかる¹⁰⁾。

その他、ヤングによる人物寸評も中々興味があり、ディジョンではフランス化学界の第一人者、ド・モルヴォ氏と会食し、実験室を見学した事を詳しく記録している (pp. 242~246)。著書と実際の人物との違いを指摘している箇所も興味深い。例えば、「著者の本を読んで大喜びし、この人には誇張がない、全部筋が通っている、多くの人に見られるあの愚劣さに染っていない人物がまさにここにいる、—そう思った後で、かくも狭量なる外見に出くわすとは！」(p. 317)。最後に、本稿で取り上げたような貧困、非衛生状態、悲惨な生活を強いられながらも必死で生きている民衆への深い同情と共感を示した後の地理学者¹¹⁾こそ、ジュール・シオン (1879~1940) である。アーサー・ヤングは他にも、この『フランス紀行』をもって、フランス革命前の様相を示す書として、『アルザスの歴史 Histoire de l'Alsace』に関する著書の中に引用されている人物である。本稿でアーサー・ヤングを取り上げたのも、誰にでもある地理的好奇心を見事に発揮し、記録に残しておいてくれれば、ある時代、ある国についての地理的様相を知る貴重な資料を提供する例となることを、以上の分析で提示したかったからに他ならないのである。

本稿は、上越教育大学特定研究「異文化圏を交流する生活者としての人間類型に関する研究 (平成2・3年度、研究代表者 加藤 章)」の分担執筆を機会にまとめたものである。Arthur Young の名と『フランス紀行』の存在を知り読むことを思い立ったのは、1969年当時、フランス東部の中心都市、ストラスブールの国立図書館で『Histoire de l'Alsace』を読んでいた頃であったゆえ、論文化するまでに実に四半世紀の歳月が流れたことになる。

注

- 1) 大嶽幸彦「19世紀前半における2人の「地理学者」の観察眼——スタンダールとゲーテの旅行記を中心に——」拙著『旅と地理思想』所収、大明堂、1990年、pp. 53~78
- 2) ヘットナー著・磯崎 優・守田 優共訳『地理学、その歴史、本質および方法』、大阪教育大学、地理学報告、27号、1989年、p. 136(A. Hettner『Die Geographie, ihre Geschichte, ihre Wesen und ihre Methoden』Ferdinant Hirt, 1927)
- 3) アーサー・ヤング著・宮崎 洋訳『フランス紀行』法政大学出版局、1983年、431P.
- 4) 旅の効用は現実によって想像力を正すことにある。
A. Kobayashi et al. ed.『Remaking Human Geography』Unwin Hyman, 1989, p. 159
- 5) ゲーテ著・小牧健夫訳『詩と真実』第二部、岩波書店、p. 184
- 6) イギリスにおいては、18世紀初頭、いわゆるノーフォーク(Norfolk)農法の確立によって、従来の休閑を伴う農法から、新しい輪栽農法へと進化している。すなわち、大麦—クローバー—小麦—飼料カブの4年輪作の体系が確立し、ヨーロッパ大陸へも普及していったのである。
藤岡謙二郎編『歴史地理学、朝倉地理学講座7』朝倉書店、1967年、p. 91
- 7) 「16世紀から18世紀までのロンドンやパリでは、あらかじめ、街路にむかって、「ギャル・ロー！」もしくは「ガーディ・ルー！」直訳すればどちらも“水に注意”）と大声で叫び、通行人に警告するのが一般的な慣行になった。通行人はあわてて退避することになるが、夜おそく千鳥足で帰宅する酔っぱらいたちは、まにあわずに、頭上から汚物ををどっさりふりかけられることもまれではなかった。」と言われているのであるから、都市の内部の臭気がいかにひどいものであったか、想像できよう。
木村尚三郎・鯖田豊之編『西ヨーロッパと日本人』研究社、昭和51年、p. 280
- 8) ルイ＝セバスチャン＝メルシエ著・原 宏編訳『18世紀パリ生活誌(上)』岩波書店、1989年、pp. 92~105は馬車や騎馬による事故を詳しく論じている。
- 9) 例えば、次の文献を参照。
君塚 進校注「仏英行(柴田剛中日載七・八より)」、沼田次郎・松沢弘陽校注『西洋見聞集』所収、岩波書店、1974年
森 亘編『異文化への理解』東大出版会、1988年
平川祐弘『西欧の衝撃と日本』講談社、1974年
久米邦武編『米欧回覧実記(-)』岩波書店、1977年
富田 仁編『異文化との出会い』三修社、1986年
木村力雄『異文化遍歴者、森有礼』福村出版、1986年
- 10) J. R. マクドナルドは19世紀末に至るまでのフランスにおける人間集団の孤立について、次のように述べている。
「今世紀に至るまで、長年の間、歴史の歩みは遅く、人間集団の孤立——お互いに比較的自然的な近さの所に居住していてさえ——は例外というよりもむしろ通例であった。これらの状況の中で、フランスの農村はあるものは大きく、あるものは小さいといった認識上様ざまな地域の複雑なつぎはぎ細工の中で展開した。各々の地域は自然的、文化的、経済的、政治的要因に基づいた或る内的統一を持っており、近隣とは著しく異なっていた。」J. R. McDonald『A Geography of regions』W. M. C. Brown, 1972, p. 16
- 11) 西村孝彦「ジュール・シオン地理学考」金沢大学文学部地理学報告、No. 4, 1988, p. 99

他に、D. M. スミス著・竹内啓一監訳『不平等の地理学——みどりこきはいずこ——』古今書院、1985年 (David M. Smith『Where the Grass is Greener: Living in an Unequal World』1979) は地球上のさまざまな不平等を論じている。

- 12) P. Dollinger éd. 『Histoire de l'Alsace』Edouard Privat, 1970, 特に, p. 313, p. 314, p. 358 にアーサー・ヤングの本から引用がなされている。

参 考 文 献

- R. Lebeau 『Les grandes types de structures agraires dans le monde』Masson et C^{ie}, 1972
 E. Juillard 『L'aménagement du territoire français...en 1837, d'après Stendhal』(1969),
 E. Juillard éd. 『La "Région", Contributions à une géographie générale des espaces régionaux』Editions Ophrys, 1974
 Comité national de géographie, commission de géographie rurale 『Atlas de la France rurale』La documentation française, 1984
 F. Hoffet 『Psychanalyse de l'Alsace』Editions Alsatia Colmar, 1973
 山本莊毅編『水文学総論』共立出版, 1972年
 大嶽幸彦「人間主義の地理学に関する覚書き」地理学評論, 第61巻1号, 1988年
 大嶽幸彦「風土と風景概念に関する地理学的アプローチ」上越教育大学研究紀要, Vol. 11, No. 2, 1992年
 大嶽幸彦「地理的思考と地理的想像力に関する一考察」上越教育大学研究紀要, Vol. 12, No. 1, 1992年
 千田 稔『風景の構図——地理的素描——』地人書房, 1992年
 愛知大学総合郷土研究所編『景観から地域像をよむ』名著出版, 1992年

The Geographical Eye of Observation of Arthur Young in the Period of the French Revolution

—— focusing on his “Travels during the Years 1787, 1788 & 1789” ——

Yukihiko OHDAKE*

ABSTRACT

The object of this research consists in the analysis of excellent examples of the geographical eye of observation, quoting some articles from the “Travels during the Years 1787, 1788 & 1789” written by Arthur Young. The author tried to analyse them, classifying into the scenery and landscape, climate and hydrography, landownership and land use, cities, road, transportation, commercial and industrial activities, France under the French Revolution. The result is as follows: This book was proved to be one of the valuable documents to know the geographical phenomena under the French Revolution.

* Division of Social Studies